ホトトギスのはなし

ざっとむかし、あるところに、両親に早く死に別れたあねといもうとが二人で住んでいたんだと。

あねはすごい働きもので、田畑をいっしょうけんめいつくって、いもうとをそだてていたんだと。

うめえごっつぉだの、ぜにがあっときには、まずいもうとにくっち、わがは、がまんしていたんだと。

着るものでも、いもうとにはいいものをきせて、わがは、ボロの着物をきて、苦労して育てていたんだと。

いもうとが病気になったときには、遠いところまでいっては、薬草をさがしてきて、なおしてやったんだと。

いいあんべにいもうとはでっかくなっていったが、あねの苦労はひとっつも知らねがったんだと。

あさめしだのゆうめしだののときに、ごっつぉがねえと「となり近所の人らは、うめえものばっかりくっていんのに、わげでは、ダンゴだの、みそばっかりで、ごっつぉはなんにもねぇ」ってゆってはあねをいじめていたんだと。

「ねえちゃんは、おれがいねえときにはうめえものを食っていんだべ。いっときには、ごっつおをかくしてくわせねえんだべ。」って思っていたんだと。

あるとき、あねは、村の人からボタモチを二っつもらったんだと。やさしいあねは、わがは、くいたくてもがまんして「ボタモチを二っつもらったから、くっておくれ」って、いもうとに食わせたんだと。「これはうめえ」って、いもうとはよろこんで食ったんだと。

ひねぐっちいるいもうとは、「こだにうめものを、二っつだけしかくれるはずがねえ、重箱の一っつもくっちゃんだべ」ってあねをいじめたんだと。

やさしいあねも、さすがにおこって「そだことねえ、となりのバアさまにきいてみろ。そだことゆうんだったら、腹をさいてみてみろ」って、ケンカになったんだと。

いもうとは、ほんとにあねの腹をさいたんだと。

あねのいうように、腹のなかには米粒一つなかったんだと。いもうとは「わりごとしたわりごとした」ってあやまったげんちょ、おそがった。死んだあねが生きかえるはずはねえがった。そこに神様がやってきて。「なんで、ねえちゃんの腹をきっちまったんだ。ぼっとしてやったのか。」